



Title	フェリックス・ガタリと実存の問題：実践と理論
Author(s)	濱田, 力稀
Citation	メタフュシカ. 2023, 54, p. 55-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

フェリックス・ガタリと実存の問題

——実践と理論——

濱田力稀

§ 1. はじめに一問題の所在と目的—

目指す研究では、フェリックス・ガタリにおける「実存 (existence)」の概念を扱う。ガタリは出版されているテキスト内で、たびたび「実存」という概念を用いるが、ガタリの前期にあたる 1950 年代から 60 年代後半のテキストでは、時折散見される程度である。しかしながら、ガタリ後期の著作にあたる CS や CH では、「実存」の概念を用いる回数が急増するのである。前期 (1950 年代～1960 年代後半) や中期 (1970 年代～1980 年代後半) の著作にあたる PT や IM を例にとると、前者では著作全体で 10 回程度、後者では全く言及がなされない。一方で、CS や CH では、前者は 100 回以上、後者も比較的短いテキストであるにもかかわらず、70 回の言及がなされている。これは目を見張るほどの差である。

では、実存という概念を扱うことによって、何が問題となるのだろうか。ここでの問題を大きく二つ設定する。一つは、生成変化 (devenir) の概念との関連である。ここでは詳細に立ち入ることはできないが、千葉雅也はドゥルーズの存在 / 非存在の脱構築として生成変化を挙げている。そしてガタリも、ドゥルーズの議論を取り上げて、存在 / 非存在の脱構築の先に「実存化する機能 (la fonction existentialisante)」があると述べる。ここから、生成変化と実存化する機能は同一のものなのかという問いが生まれる。特に、生成変化はドゥルーズとガタリのなかでも有名な概念である。したがって、なおさら生成変化をあえて実存化する機能と呼び変えるのにはどういった背景があるのかという疑問を持たずにはいられない。ここで実存の概念と生成変化の概念の関係性が問題になる。

二つ目の問題は、ガタリの実存という概念と実践との結びつきである。ドゥルーズとの共著に依拠し、彼らの概念群に取り組む傾向の強かったこれまでのガタリ研究 (というよりもドゥルーズ＝ガタリ研究) では、理論的な面にばかり目を向け、ガタリの実践が蔑ろにされる傾向がある。それを考慮に入れ、本研究では、ガタリが実存という語を使って言いたかったことに加え、それ

がどのように実践に結びついているのかを問題とする。以上が、本研究における問題である。

したがって、目指す研究には二つの目的がある。一つ目は、ガタリにおける「実存」と生成変化の概念との関係を文脈に応じて詳らかにし、そのうえで実存の概念がどのように理論と実践の両面で機能しているのかを明らかにすることである。繰り返すが、この実存という概念は、特に後期ガタリの著作で最も多く見られるものである。さらに、フランソワ・ドスによると、ガタリは自分の日記の中でジャン・ポール＝サルトルの文体の真似をするほどに、彼の実存主義哲学から影響を受けてもいた¹。実際に、ガタリは著作全体を通してサルトルを参照している。特にCSに所収されている「ジュネ再発見」では、サルトルの概念群を大いに用いてジャン・ジュネを論じている²。これは、この著作が1989年に出版されたことと、当時のサルトル離れを考えてみても異例のことであり、ガタリがどれほど多くサルトルに負っているのかわかるだろう。一方で、こうした顕著な「実存」という語への傾倒にもかかわらず、この言葉を主題として扱っている研究はほとんどないに等しく、英語の論文で散見される程度である³。加えて、例えばJoe Gerlachらの研究は、実存という語が用いられるようになった背景や文脈に言及しているとはいえない。このことは、ガタリの用いる実存の概念が、その時々文脈によって「自由に」使われていることを示しているのではないだろうか。このようなガタリにおける実存の概念に対する取り組みの希薄さ、そしてそれに反比例するガタリによる実存の重視に鑑みて、目指す研究では実存の概念を主題とした研究に取り組んでいく。

二つ目の目的は、ガタリの実践を理論と並列して扱うということである。ガタリは何よりも「動く」人であった。彼一人で、あるいはドゥルーズと共同で創造した様々な概念は、新奇性に溢れ、私たちの知的好奇心を掻き立てるものである。一方で、ガタリの場合はそこに実践が伴っていたことを忘れてはならない。彼は何よりもまずは政治活動家で精神分析家であり、そこには政治活動の「現場」、臨床の「現場」の目線があるのである。そのため、実践も同時に扱うのはむしろ当然というべきである。そして、ガタリが理論と実践を並行させた人物であることから、次のような問いが生まれる。すなわち、ガタリの実践において、実存はどのように機能するのだろうか。以上二つの目的を総合すると、目指す研究は、ガタリにおいて実存という概念がどのような位置を占めており、どのようにガタリの実践と理論の両面で機能しているのかを明らかにするものである。

§ 2. 主観性とはどのようなものか

本稿では、議論の出発点として、先にも取り上げた「実存化する機能」の語を設定する。主題である「実存」の概念は多く用いられる一方で、多様な語との組み合わせで用いられることが常である。例えば、「実存の領土 (territoire existentiel)」、「実存的リトルネロ (ritournello existentiel)」などがそれである。そして、その組み合わせの頻度にはばらつきがある。そこで、

¹ BC, p41. (39頁)。

² 実際、サルトルは『聖ジュネ』という題の論考で、ジュネを主題として論じていた。詳しくはジャン＝ポール・サルトル『実存主義とは何か』に所収の、海老原武「1945年の実存主義」を参照。

³ 例えば、Joe Gerlach and Thomas Jellis, Guattari: impractical philosophy, *Dialogues in Human Geography*, vol.5(2), 2015, pp131-148 など。

本研究で生成変化との関係を問題とすること、また議論に一貫性を持たせる必要性から、この語を出発点とする。

実存化する機能の語を厳密に分析するには、なるべく造語やガタリ概念によって定義されていない部分が必要になる。そうしたテキストを集めると、五箇所が挙げられる。それらを分析することで、実存化する機能の特性を五つ引き出すことができる。ここでは特に、その一つである『カオスマーズ』における言及を取り上げる。そこでは、実存化する機能は「主観性を生産する機能」⁴と呼ばれている。ではここで提示される「主観性 (subjectivité)」とはどのようなものなのか、そして具体的にどのように主観性は生産されるのか、これらの問いを本稿では主題として扱う。

それでは、実存化する機能の特性の一つである主観性の生産の議論に移る。そもそも、主観性 (subjectivité) とはどのようなものなのだろうか。ガタリは 1991 年に行われたインタビューに次のように答えている。

無意識的主体の形成というのは、あらかじめ決定された主体——つまりマスメディアや集合的施設によって社会のなかにくもたらされている>主体——からの脱出を意味するのです。それは主観性の生産、つまり自分自身の創出、人が自分が生きているコンテキストを創出するということです⁵。

つまり、主観性とは、自分の生きているコンテキストであるということができる。しかし、主観性の語は個人にのみ適用されるものではない。実際にガタリは次のように述べている。「主観化 (主体化) のベクトルは必ずしも個人を経由するものではない。個人というのは、現実には、人間集団、社会—経済的集合、情報機械などすべてを巻きこんだ過程の『端末』^{デジタル}に位置するものである」⁶。このように、個人とはそもそも集団や社会、経済、メディアといった数多くの要素との関係で初めて規定されるものであるということができる。つまり、主観性という語は、個人だけでなく、というよりもむしろ、集団性の次元により根底的に関わるものであるだろう。篠原雅武は、ガタリの用いる「織り目 (tissu)」の語に着目し、集団で存在することは「運動し、変化し、みずからを形成していく過程において起こる事態である」⁷と述べている。以上のように、ガタリのなかでは、集団は個人に先立つ。そして、この集団の存在様態こそが、人の生きるコンテキストを成しているものの一つである。

しかしそれだけではない。ガタリは主観性を言語学や記号学的な枠組みにも関連させているの

⁴ CH, p52. (39 頁)。この語は主体感や主体性とも訳されるが、ここでは主観性の訳語を採用する。それは、一つには主観性と訳されるのが一般的で、subjectivité の語を想起しやすいからであり、もう一つは主体性という訳語に比べて、集団的な意味合いがより濃く現れるからである。

⁵ フェリックス・ガタリ他「一般概念＝普遍主義を超えて」『フェリックス・ガタリ思想圏——横断性からカオスマーズへ——』杉村昌昭訳、大村書店、2001 年、12 頁。

⁶ TE, p24. (22 頁)。

⁷ 篠原雅武「主観性/主体性の拡張」『現代思想』第 41 巻第 8 号、2013 年 6 月、青土社、78 頁。

である。実際にガタリは、主観性の生産を「言表行為の動的編成 (l'agencement de l'énonciation)」⁸ と言い換えている。これについて、山森裕毅は次のように述べている。「意味のある発話がつねに権力構成体に基づいていることになれば、意味は、(言語それ自体だけでなく) 発話者が言おうとしたことや言いたいことなどの、個人的な意図や欲求にも還元することができないのである」⁹。ガタリにとって、言語内の意味は所与のものとしてあるのではなく、生産されるものである¹⁰。すなわち、ある個人が使用している言葉の意味は、集団によって付与されたものなのである。この意味でも、集団は個人に先立つのである¹¹。

ここで主観性という語の内実が明らかになった。まとめると、主観性とは集団の存在様態であり、同時に個人の存在様態でもあると同時に、そうした存在様態を形成する諸々の要素の交差点である。そして、それは言語学、記号学にも深く関係している。また、ガタリにとってこの語の意義は、主観性を「生産する (produire)」ということに向けられている。ではなぜ、新たな主観性を「生産する」必要があるのだろうか。

ガタリは集団の存在様態としての主観性が、資本主義や精神分析による家族主義に支配され、主観性が画一化することに大きな問題意識を持っていた¹²。これについて、彼は 'De la production de subjectivité' で詳しい分析を行っている。この分析は、主観性のいわば考古学 (archéologie) とでもいうべきものである。彼は、フランスがその歩む道と言表行為を単声的なもの (画一的なもの) にしたとし、当時の西洋社会の主観化 (subjectivation) に基盤を与えているものを「三つの声 (trois voix)」として分類している。その三つの声とは、それぞれ「権力 (pouvoir)」、「知 (savoir)」、そして「自己準拠 (auto-référence)」の声である¹³。

まず権力の声は、キリスト教が最盛を誇る時期に、懺悔による教会権力への主観の心身の服従の時代として描かれる。次の知の声は、科学技術と資本主義が結託し、一般性や等価性を基盤とした主観の画一化の時代として提示される。そして最後に、自己準拠の声は、現代がポスト・メ

⁸ 「言表行為の動的編成 (l'agencement d'énonciation)」の語を厳密に定義することはここではしないが、ガタリの主観性という語は言語的な射程を伴ったものであることがわかるだろう (Félix Guattari, *Vertige d'immanence*, *Chimères* no38, Eres, 1992, p1. フェリックス・ガタリ「内在の眩暈」『フェリックス・ガタリ思想圏——横断性からカオスモーズへ——』杉村昌昭訳、大村書店、2001年、66頁)。

⁹ 山森裕毅「フェリックス・ガタリにおける記号論の構築——『分子革命』の三つの記号系——」『年報人間科学』大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、2011年、158頁。

¹⁰ ここにはドゥルーズのLSと同様の問題系があるだろう。

¹¹ 例えば、ジョージ・オーウェルの『一九八四年』に登場する「ニュー・スピーク (new speak)」は象徴的である。この物語では、人々の用いていた言語に取って代わる、語彙の極度に簡略化された言語であるニュー・スピークによって、人々の思考範囲や生活様式などが制限される様子が描写されている。

¹² ガタリが主観性を生産することについて語る際に、頻繁にサルトルの集列性 (sériabilité) の概念を引き合いに出す理由がここにあると考えられる。集列性とは、「実践的惰性態」としての集団の機能に従属する生活スタイルの空疎な反復であるとされる。竹本はサルトルの集列性を、バスを待つ人々の例を用いて説明している。バスを待つ人々は、ある特定のバスを待っているという点で、バスという物体を通じた関係にある。しかし、バスの視点から見ると、バスを待つ人々は個性を剥奪された没个性的な人々の集まりであるとされる。ガタリはこのような集列性からの脱却をラボルドでの実践で目指した (竹本研史「稀少性と余計者——サルトルにおける『集列性』から『集団』へ——」『Resonance』東京大学教養学部フランス語部会、2013年)。また、篠原やジェノスコもこのようなガタリの問題意識に触れている。

¹³ Félix Guattari, *De la production de subjectivité*, *Chimères* no4, Éres, p4, 2019. (CH, 12頁)。

ディア時代として地球規模での情報網を得た時代の、創造性や自己存立性（auto-consistans）の可能性を開くものとして提示される。しかし、この自己準拠の声は、それ自体諸刃の剣である。なぜなら、地球規模の情報網が資本主義権力と結託したとき、主観性は資本主義に絡め取られ、身動きが取れなくなってしまうからである。このことを、ガタリは次のように述べている。

資本主義はすべてを“にっちもさっちもならない”状態、すなわち諸個人がそれぞれ私的にかつ罪責感をもたされるような様式でおのおのの分け前をひきださねばならない、未分化でありながら読解されうる流動状態に帰着させる [...]。それは交換可能の制度であり、何もかもが《しかるべき》釣り合いでもって何ものかに相当しうる¹⁴。

一方で、自己準拠の声がこのような資本主義に対抗する力になり得るのもまた事実である¹⁵。実際に彼は、ラッツァラートらの行なった情報網を用いた政治実践である、ラジオ・アリーチェなどの自由放送ラジオの運動を高く評価している。

このように、ガタリは資本主義やその他の技術によって主観性が画一化される状況に並々ならぬ危機感を抱き、そうした状況を変革しようと奮闘していた。だからこそ、彼は新たな主観性の生産を試みるのである。では、ガタリはどのようにして主観性を生産しようとしたのだろうか。ここで彼の実践に注意を向けてみたい。

§ 3. いかにして新たな主観性を生産するか

既に見てきたように、ガタリが主観性という語を使って表現しようとしたのは、個人/集団の存在状態だった。そしてガタリは、そのようなものとしての主観性が、資本主義などに絡め取られ、身動きできなくなっている状況を危惧していた。そこで、ラボルドをはじめとする様々な場所で、新たな主観性を生産しようとするのである。では、ガタリはどのようにして新たな主観性を作ろうとしたのだろうか。本節では、ガタリが実際に行った実践を辿ることで、どのように主観性を生産するのかを議論する。ここでは特に、ガタリがラボルドで行った実践である「グリーユ (grille)」を扱う。実際に、ガタリは CH で、主観性の生産を実践する場所がラボルド精神病院であったと述べ、グリーユを通して行なった活動に言及している¹⁶。それに際して、まずはラボルド精神病院の簡潔な紹介をしておく。

ラボルド精神病院は、ジャン・ウリ (Jean Oury) が設立した病院であり、パリの南、フランス中部のクール＝シュヴェルニーに位置する病院である。もとはフランソワ・トスケル (Francesc

¹⁴ RM, p25. (3 頁)。

¹⁵ Op. ct, p7. (前掲書、17 頁)。

¹⁶ CH, p31-32. (15-16 頁)。

Tosquelles)に指導を受けたウリが、「制度論的精神療法 (psychothérapie institutionnelle)」¹⁷を実践する場であった。この病院の目標は『『集列性』からの脱却であり、個人や集団がテクノクラートの的な展望ではなく、倫理的な展望のなかで、おのれの実存の意味を獲得しなおしていく (引用者改訳)」¹⁸ ことである。そして、その方向性は「看護する者と看護される者の関係、ならびに在院患者と病院職員の関係をなくす方向に向かう」¹⁹。ガタリは以上のような志をもった環境に1950年代から積極的に身を置き続け、ウリと共に様々な実験的实践を行っていった。そして、このような目標・方向性から生まれた実践が「グリーン」である。

Chimères 誌にはガタリの「グリーン (la < grille >)」という論考が掲載されている。これによると、グリーンとは先進的な組織図を作成するために構成するものであり、その組織図では、三つに分類される仕事に従って各々が自らの場所を持つ。ここでの三つの仕事とは、①規則的な仕事、②偶発的な仕事、③特定のカテゴリー上で専門化することが望ましくない、集団的な仕事である。この三つ目の仕事がグリーンを特異なものにしている要素で、ガタリはこれを「回転 (roulement)」と呼んでいる。こうした説明から、ガタリはグリーンを次のように定義している。「グリーンはしたがって、仕事との関係を通じて、個々人の役割を集団的に運営することを可能にする、二重の入り口への図表なのである (引用者改訳)」²⁰。では、このグリーンの実践はいかにしてなされたのだろうか。

グリーンの実践は、当初からラボルド精神病院での活動に組み込まれていたわけではない。様々な実験的な活動を通じ、グリーンという実践を作成する必要性のために生み出されたものである。ガタリのラボルドに対するコミットメントは、多くの新しい作業場 (atelier)、つまり委員会や新聞発行部、絵画、鶏小屋、園芸といったものを設置することだった。すると、患者だけではなく病院職員もそうした活動に関わる必要が生まれてくる。それは患者だけでは人手が足りないからである。結果として、この活動への職員の組み込みは機能することになった。しかし、会社員や農家といったさらに多様な人々がラボルドの活動に参加することになると、運営の仕方を考える必要が生まれてくる。なぜなら、看護師とその他の職員という職務間の断絶が起こる可能性があるからである。ますます複雑化していくラボルドの組織図を運営していくために、さらなる変化を引き起こす必要が生まれた。そうして誕生したのが、グリーンの活動である。それは、職員間、職務間の関係をより厳密に設定する役割分担表のようなものである。また、これはローテーション (roulement) を念頭に置いたものでもあった。一般的な病院とは異なり、看護師が看護の仕

¹⁷ 制度論的精神療法は、トスケルから指導を受けたウリが構想したものである。ウリはこれを次のように定義している。「それは『そこにあるもの (il-y-a-là)』の使用である。『そこにあるもの』とは、本質的に精神療法的なベクトル (そこには生物的・社会的技法も含まれる) における構造、システム、戦略、相互関係、建築空間、権力の階層性、利得、屈折した知、葛藤、イデオロギーなど (一言で言えば『精神医学の施設』) のことである」(ジャン・ウリ「制度精神療法」『精神医学と精度精神療法』三協康生監訳、春秋社、2016年、253頁)。

¹⁸ Félix Guattari, *De Leros à La Borde*, ligne, 2012, p71. (フェリックス・ガタリ『精神病院と社会のはざままで——分析的实践と社会的実践の交差点——』杉村昌昭訳、水声社、2012年、98頁)。

¹⁹ Ibid, p70. (同書、97頁)。

²⁰ Félix Guattari, *La < grille >*, *Chimères* no34, Éres, Janvier 1987, pp3-4. グリーンは、杉村らによる訳では「役割分担表」と訳される。実際に、グリーンには役割分担表のような側面が多くある。

事だけを、清掃員が清掃の仕事だけをするのではなく、清掃員は看護に、看護師は清掃に携わるといった、異なる職種間でもローテーションが図られたのである。

しかし、このような実践は常にうまくいくとは限らない。ドスによると、最大の障壁の一つは給与をどのように分配するかであった²¹。さらに三脇康夫はガタリを参照して、グリーユの二つの危険性を論じている。一つは、役割分担の回転が止まってしまうことであり、もう一つは、参加者が役割分担表の運営に固執してしまうことである²²。このようなことが起これば、流動的だったグリーユの実践は固着してしまい、当初の目的から離れたものになってしまうだろう。結局は、グリーユはラボルドの時勢に合わせて企図された実践であり実験なのである。そのため、機能しないならば新たな実験的实践を探す必要があるだろう。また、ガタリは当時の状況を振り返って、「患者に注射をすることを恐がる人や夜間の仕事が耐えられない人がいたり、とりわけ多くの人がミーティングを取り仕切ったりすることや、徹夜__の看病をうまくできなかった」²³と述べている。実践を行うにあたって、その実践に抵抗のある人々がいることはやはり避けることのできないものなのだろう。

一方で、そうした人々はリーダーとしての才能を発揮したり、自分の気づかなかった得意なことを発見していくといった過程を経験することにもなった。そしてこれは職員だけでなく、患者にも同様に言えることである。患者のなかにも、絵画において才能を開くもの、肉体的な仕事にも積極的に取り組むようになったものが現れ、これまでは接点のなかった活動に「気晴らし以上のものを見出すようになった」²⁴のである。これをガタリは「世界との関係が刷新された」²⁵と表現している。つまり、ラボルドの本質的な方向性である、「看護する者と看護される者との関係、ならびに在院患者と病院職員の関係の差別をなくす方向に向かう」という方向性へと舵を切ることができたということである。そして、人が世界と関係する仕方に変化が起こったのである。この、「世界と関係する仕方が変化するということが」が注目すべき点である。これはすなわち、「自分の生きるコンテクスト＝織り目」、主観性が新たに生産されたということに他ならない。加えて、ガタリは次のようにも述べている。「病者の主観性や看護者の主観性といった個人的主観性は、主観性の生産の集会的な動的編成アジェンスマンと切り離して考えてはならないということ。この動的編成はミクロ社会的な次元のみならず物質的次元や無意識の次元をも包含するのである」²⁶。つまり、主観性は個人的な次元と集团的な次元のどちらか一方だけで考えることのできるものではないのである。

本節では、ガタリにおける主観性の生産を具体的な実践の次元で議論した。そして、主観性を生産する試みとしてグリーユを取り上げた。このグリーユは、それまでである個人が生きていたコ

²¹ BC, p60. (58 頁)。

²² 三脇康生「精神医療の再政治化のために」『精神の管理社会をどう超えるか？——制度論的精神療法の現場から——』松籟社、2000 年、158-159 頁。

²³ Félix Guattari, *De Leros à La Borde*, ligne, 2012, pp68-69. (フェリックス・ガタリ『精神病院と社会のはざまで——分析的実践と社会的実践の交差点——』杉村昌昭訳、水声社、2012 年、95-96 頁)。

²⁴ Ibid, p72. (同書、99 頁)。

²⁵ Ibid. (同上)。

²⁶ Ibid, pp90-91. (126 頁)。

ンテキストを、ラボルド精神病院という集団において刷新するものであった。これらの議論のなかで、本稿での問いの一つである生成変化との関係も少し明らかになったのではないだろうか。つまり、世界との関係が刷新されることによって自分の生きるコンテキストが変化するということが、これはその個人も変化するというのではないのだろうか。ではこれによって、生成変化と実存化する機能を同一のものとみなしても良いのだろうか。現時点で結論を出すことはまだ尚早だろう。ここではひとまず、生成変化との関係性が問題になることを提示するにとどめたい。

§ 4. 終わりに

本稿では、フェリックス・ガタリの実存化する機能という語の特性の一つである「主観性」に主に焦点を当てて議論を行なった。主観性とは自分の生きているコンテキストであり、集団の存在様態とも呼べるものであった。この主観性は個人や集団といった特定の領域にのみ存在するのではなく、多くの領域を横断する（transverser）ものであった。特に、ガタリにおいては集団が個人に先立ち、個人に対して意味作用を付与していくということが語られる。主観性のこの側面から、ガタリはそれを言表行為の動的編成と換言し、記号論的な要素も導入した。このような主観性を論じるガタリの企図は、現代の集列化した主観性に対して、新たな主観性を「生産する」ということに向けられていたのだった。以上のような主観性を生産する試みとして挙げたのが、グリーユの実践である。グリーユは役割分担表とでも呼べるものであった。その目的は、看護師や患者といった地位的な区別をなくし、それぞれを編成して病院全体の活動に参加させるものだった。そうした実践の只中では、職業的な拒否反応や金銭的な問題、流動性の問題などが現れるが、同時にそのプロセスを通して、画一的ではない集団が生まれ、それに伴って個人が自身のユニークさを新たに発見し、その人々が世界と関わる方法が変革されていく。このようにして、既存の社会体系に与えられた所与としての自分から抜け出すことが可能になるのである。

以上の本稿での議論の他にも、実存化する機能にはあと四つの特性が残されている。これら四つの機能を明らかにすること、そしてそれらを実践と結びつけていくことが今後の課題となる。それに加えて、生成変化との関係も明らかにしていく必要がある。生成変化と実存化する機能とは同一のものなのだろうか、それとも異なる概念なのだろうか。この問いへの答えも、また探求される必要がある。

（はまだりき 科学技術社会論・博士前期課程）

【文献略称一覧】

- BC・・・François Dosse, *Deleuze et Guattari: Bibliographie Croisée*, Decouverté, 2007. (ドス、フランソワ『ドゥルーズとガタリ——交差的評伝——』杉村昌昭訳、河出書房新社、2009年)。
- CS・・・Félix Guattari, *Cartographies Schizoanalytiques*, Galilée, 1989. (ガタリ、フェリックス『分裂分析的地図作成法』宇波彰訳、河出書房新社、1998年)。
- CH・・・Félix Guattari, *Chaosmose, ligne*, 2022. (ガタリ、フェリックス『カオスモーズ』宮林寛、小沢秋広訳、河出書房新社、2004年)。

- EAO・・・Félix Guattari, *Écrits pour L'Anti Œdipe*, ligne, 2012. (ガタリ、フェリックス『アンチ・オイディプス草稿』國分功一郎、千葉雅也訳、みすず書房、2010年)。
- IM・・・Félix Guattari, *Inconscience Machinique: essais de schizo-analyse*, Recherche, 1979. (ガタリ、フェリックス『機械状無識——スキゾ分析——』高岡幸一訳、法政大学出版局、2004年)。
- PT・・・Félix Guattari, *Psychanalyse et Transversalité*, La Découverte, 1972. (ガタリ、フェリックス『精神分析と横断性——制度分析の試み——』杉村昌昭、毬藻充訳、法政大学出版局、1994年)。
- RM・・・Félix Guattari, *La Révolution Moléculaire*, Les Prairies ordinaires, 2012. (ガタリ、フェリックス『分子革命——欲望社会のミクロ分析——』杉村昌昭訳、法政大学出版局、1988年。ガタリ、フェリックス『精神と記号』杉村昌昭訳、法政大学出版局、1996年)。
- TE・・・Félix Guattari, *Les Trois Écologie*, Galilée, 1989. フェリックス・ガタリ『三つのエコロジー』杉村昌昭訳、平凡社、2008年。
- AO・・・Gille Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti Œdipe: Capitalisme et Schizophrénie*, Minuit, 1972. (ドゥルーズ、ジル、ガタリ、フェリックス『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症——』上下巻、宇野邦一訳、河出書房新社、2019年)。
- MP・・・Gille Deleuze, Félix Guattari, *Milles Plateaux: Capitalisme et Schizophrénie 2*, Minuit, 1980. (ドゥルーズ、ジル、ガタリ、フェリックス『千のプラトー——資本主義と分裂症——』上中下巻、宇野邦一他訳、河出書房新社、2018年)。
- QP・・・Gille Deleuze, Félix Guattari, *Qu'est-ce que la Philosophie?*, Minuit, 1991. (ドゥルーズ、ジル、ガタリ、フェリックス『哲学とは何か』財津理訳、河出書房新社、2012年)。

【参考文献一覧】

- Félix Guattari, *Vertige d'immanence*, *Chimères* no38, Éres, 1992, pp1-19.
ガタリ、フェリックス他「内在の眩暈」『フェリックス・ガタリの思想圏——横断性からカオスモーズへ——』杉村昌昭訳、大村書店、2001年、66-91頁。
- Félix Guattari, *De Leros à La Borde*, ligne, 2012.
ガタリ、フェリックス『精神病院と社会のはざまで——分析的実践と社会的実践の交差点——』杉村昌昭訳、水声社、2012年。
- Joe Gerlach and Thomas Jellis, Guattari: impractical philosophy, *Dialogues in Human Geography*, vol.5(2), 2015, pp131-148.
- ウリ、ジャン「制度精神療法」『精神医学と精度精神療法』三脇康夫監訳、春秋社、2016年。
- オーウェル、ジョージ『一九八四年〔新訳版〕』高橋和久訳、早川書房、2020年。
- サルトル、ジャン＝ポール『実存主義とは何か』伊吹武彦他訳、人文書院、2021年。
- ジジエク、スラヴォイ『身体なき器官』長原豊訳、河出書房新社、2004年。
- 佐藤嘉幸『権力と抵抗——フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール——』人文書院、2008年。
- 佐藤嘉幸、廣瀬純『三つの革命——ドゥルーズ＝ガタリ政治哲学——』講談社、2017年。

篠原雅武「主観性/主体性の拡張」『現代思想』第41巻第8号、2013年6月、青土社、74-84頁。

竹本研史「稀少性と余計者——サルトルにおける『集列性』から『集団』へ——」『Resonance』
東京大学教養学部フランス語部会、2013年、19-30頁。

三脇康夫「精神医療の再政治化のために」『精神の管理社会をどう超えるか?——制度論的精神
療法の現場から——』松籟社、2000年、131-217頁。

山森裕毅「フェリックス・ガタリにおける記号論の構築——『分子革命』の三つの記号系——」『年
報人間科学』大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、2011年、153-171頁。